

今号は、末広りの第八号、数学の無限大に通じる第8号です。

今号では、まず特集として、昨年の研究総会のテーマであった「裁判の独立」に関する論文を巻頭に掲げました。執筆陣が重量級なのに合わせて、枚数も重量級でお願いしました。次に、新進気鋭の若手の意欲作を配しました。最後に、書評では、前近代の中国の法の世界から現代の「対テロ戦争」まで、幅広く取り上げました。出版時期の関係から、今回の掲載を断念せざるをえなかったものもあります。

今号は、財政事情から、創刊号よりお世話になっていた春風社から北大生協に、印刷・製本を変更することになりました。これに合わせて、締め切り時期を見直しました。新しい試みの中の編集作業ということもあり、今回は文字通り、編集者3人の「トロイカ体制」の下での編集となりました。年少で経験不足の編集長の軽率な提案や浅薄な思いつきに対しては、高見澤、篠田両編集委員から、その都度適切なアドバイスをいただきました。編集長の独断で行ったのは、この後書を書くことくらいです。この点で、今回の編集は、お二人の「助言と承認」の下で、正しく「領導」されたというのが、偽らざるところです。また、北大生協に印刷・製本を依頼した関係で、鈴木賢さんには、事実上現地編集委員の役割をお願いしました。

今号は、当初の構想よりは分厚いものになりました。これは、なによりも編集長の見通しが甘かったこと、そして、体制転換よろしく、枚数制限に関してはいささか自由放任主義を過信したことによるものです。ここでは、神の見えざる手は働かず、やはり計画経済の手綱をしっかり握っておくべきだったかもしれません。それも、かの独裁者のごとく、「5カ年計画を4カ年で！」という調子で。しかし、その分、内容はより一層充実したものになったはずだというのが、編集長の最後の言い訳でもあります。

今回初めて編集という仕事を担当し、いろいろ感じ入ることがありました。このささやかな経験の感想を記しておくことも、無駄ではないように思います。

編集は 懇願七分に おだて二分 あとの一分は 紙の再配（神の采配）

しかし、これに対しては、有力な反対説があります。

編集は ハッター七分に 脅し二分 あとの一分は バーター取り引き

今号が、前者の通説に基づいていることはいうまでもありません。いずれにしても、編集という作業にも、困難が伴うことを知りました。そういえば、昔の偉い人がこんな言葉を残しています。

編集に平坦な大道はありません。そして、編集の険しい坂道をよじのぼる労苦を厭わない者だけに、その明るい頂上にたどり着く見込みがあるのです。

年のせいか、いささか記憶違いがあるような気もしないではありません。いずれにせよ、ひとまず無事に終わられたことを、ご協力いただいたすべての方々に感謝致します。

（阿曾 正浩）